中川経雅の交友録

—画僧・月僊との友情

倉本　昭

はじめに

本稿でとりあげる中川経雅は、寛保二(一七四二)年に神宮家・荒木田姓七氏のうち中川神主家に生まれた。皇太神宮禰宜として、従三位、三禰宜にまで上った人物である。彼は本居宣長を筆頭とする当時の和学者と広く交流を結び、その実態が『経雅卿雑記(経雅神主筆記)』によって明らかになる。

このたび『近世文学研究の新展開—俳諧と小説』(ぺりかん社平成十六年)に寄せた拙稿「経雅卿雑記拾遺」では、この『雑記』を資料に、経雅と宣長との交流について筆をついやした。しかし宣長関連資料の落穂拾いに傾斜するあまり、経雅の交流圏の具体相と、その文芸史的意義については、あまり触れることができなかった。

これまで文芸史上で、経雅の雑記がまともに取りあつかわれてこなかったのは、宣長との交流記事に触れるにせよ、二次的資料にとどまることが理由であったのかもしれない。しかし大部な自筆写本の内容を詳細に吟味していくと、宣長の伝記研究に資するにとどまらぬ、重要な価値があることに気付く。それは、当時の神官階級ならびに御師階級によって形成される文芸サークルともいうべきものが存在し、そこに鈴屋門の和学者が出入りすることで、伊勢を中心として同心円状に広がる学術情報網が確立していたことが判明する点に求められる。サークルの文芸活動の実態は、宣長関連資料とリンクさせることによって、より鮮明になるはずであるが、経雅の記録の価値は、そのサークルの実態を神主・御師階級の側からとらえていることにある。中世における神宮神官の連歌会の実態は、既に充分な研究が備わっているけれども、江戸時代の御師たちの文芸活動については、近年ようやく研究が盛んになりはじめたばかりである。(注1) そもそも御師の歴史的・宗教史的・民俗学的意義に関しても、緻密な研究が備わるのに関わらず、それらが文学研究者によって注目されることは少ないし、文

学の専門家も含めた学際的な御師研究がまとめられたケースも寡聞にして知らない。御師に関する最良のガイドブックとして、平成十四年三月に行われた「御師廃絶130年記念シンポジウム」の資料「伊勢の町と御師―伊勢神宮を支えた力―」(皇學館大学史料編纂所内シンポジウム実行委員会編)がある。これを見ても岡田芳幸氏による調査報告「伊勢の町と芸能」が文芸との関わりでは重要であるが、連歌俳諧・和学といった方面とからめた報告はない。

とすれば、『経雅卿雑記』にもとづいた拙稿を書き継いで、神官・御師による文芸サークルの実態を一層明らかにすることにも、それなりの意義があるように思われる。自分は経雅とほぼ同時代に活躍した内宮御師の妻・荒木田麗女の研究を続けてきたが、彼女の交友圏と経雅らのサークルとが重なる部分の少ないのも興味深い。(注2) その理由は両方の研究を深めていくことで、おのずから明らかになるであろうが、当時神宮には経雅らが中心となったサークル以外にも複数の輪が存在したらしいことは等閑視できまい。それらが、どのような形で関わったり対立したり並存したりしていたか。このようなことも大きな問題であるが、全ては、経雅の交友圏で行われた文芸活動の実態を浮き彫りにしたあとに検討すべき課題である。

今回は、その経雅のサークルにいるメンバーの中から、懇意にしていた画僧・月僊をとりあげて、両者の交友のありかたを眺め、そこから導かれる問題点を指摘したい。

一

月僊は名古屋に生まれ、七歳で薙髪、玄瑞を名に得て、十六歳で得度した。若くして画才に恵まれ、それを見込んだ師僧の関通上人によって江戸は芝の増上寺に派遣される。増上寺法主の妙誉定月大僧正の斡旋で、桜井雪館について画を学び、定月から一字を賜わり月僊と名乗るようになった。二十四歳の頃に江戸を去り、京に移ると、三年にわたり円山応挙について画道に精進した。伊勢の宇治中之地蔵町寂照寺の八世住職になったのは、月僊三十四の時、安永三年二月のことである。(注3)

月僊は画僧として伊勢では現在でもよく知られるが、美術史上での評価はいかほどのものか。彼の画業に関しては、早くは昭和四十九年、浜口良光氏による『月僊上人―伝記と作品』(月僊上人顕彰会　刊)があるが、大部な研究書は見あたらない。(注4)

近年、この月僊に関して、注目すべき論考があらわれた。『三重大学教育学部研究紀要(人文・社会科学)』第五十三巻(平成十四年三月)に収められた山口泰弘氏の「画僧月僊の同時代評価についての文献的検討」である。

山口氏は近世の画論類を博捜して、月僊の同時代評をまとめ、江戸時代画檀における月僊の位置付けを確認している。それによ

れば、彼の絵の評価は毀誉相半ばしている。とすると、現在におけるネームバリューに照らしても、月僊を美術史上極めて高い位置におくことには慎重にならざるをえないのかもしれない。しかし、本稿は彼の画業の美術史的価値を論じることが目的なのではない。あくまで経雅との交友の実態を探りたいのである。月僊の記事を追うことで、経雅サークルのありようの一端が見えたら、本稿の当面の目的は達せられる。

ただ、画論の中の月僊像、また画論の評価をもとに形成される**月僊像**に、実際の彼のイメージとの齟齬はないのであろうか、という**問題**は提起しておいてよい。

たとえば山口氏が引用する資料の中で、注目すべき評に以下のものがある。

最初の例は角田九華の『近世叢語』巻八より。書き下しは倉本による。また表記は現行の字体に直した。

名四方に顕はれ、請求する者絶えず。ここを以て致貲巨万、その貪銭甚だしきを以てす。人或いはこれを譏る。晩に及び山門を建て、仏殿を修す。広く経疏を買ひ、貧民を振救す。

殆ど同様の言が田能村竹田『山中人饒舌』にも見える。すなわち、

一時名四方に譟し。請求する者麕(あつ)まり至る。揮灑の際に当りては、夜を以て日に継ぐ。致貲巨万、晩年山門を建て、仏殿を修し、広く経疏を買ひ、貧民を振救す。遐邇頗偏なり。

以上のものによれば月僊は頻繁に画を所望され、揮筆料で相当の稼ぎをしたが、晩年に至って、その富を擲ち伽藍を整備し、困苦にあえぐ人民の救済を心がけたという。彼の令名は、白井華陽『画乗要略』に「最も山水人物に長じ、四方これを重んず。識者その格陋なるを惜しむ。しかれども身偏鄙の地に在り、名を海内に馳するも亦偉ならずや」(注5)とあることからも確認できる。一方で、蓄財観念に長じたことへの批判も幾分あずかったのだろうが、彼の画に俗気を見る向きもあった(注6)。

だがこれらは月僊の生活圏に直接交わり、その芸術活動に触れた人々の評語ではない。もっと血の通った月僊の姿は見られないのだろうか。

有名なところでは司馬江漢の『西遊日記』天明八年八月五日の記事がある。月僊を訪ねた江漢は「吾は東都の者にて司馬江漢と云ふ者なり、足下吾名を知らずや」と挨拶し、「如何にも知らず」とつっけんどんに返される。ところが蘭画を見せるや月僊は「忽ち其の挨拶変りて」、つまり態度を改め、「先づ内宮へ参詣して、我方にてお宿致すべし、ゆるゆる滞留し給へ」と勧めた。月僊は「肴も無き酒を出し、漸く五更過ぎに」江漢に就寝の暇を与えたほど、江漢―正確には彼の描く蘭画に関心を持ったようである。

江漢は蘭画を所望する月僊に二見が浦を見物して戻ってくると言い置き、「ダシヌケに出立しければ、月仙甚だ腹を立ちけるとぞ」と記している。江漢の筆は辛らつで、月僊は滑稽な役割を演じた末に、画風について「彼れが如きザツ画に非ず」とさえいわれている。(注7)

もう一つは小川白山『蕉斎筆記』巻十の記事である。寛政十一年六月九日京を出立した白山は月僊に会おうと伊勢に向う。「十二日は伊勢え着、直に寂照寺月仙上人へ行ければ、ありて出むかひ、いつまでも逗留すべしなど、画など数々出来、長途の労を慰め酒食ほしいままなり」と歓待された様子が記されている。(注8)

これらは月僊の姿や人柄がリアルに伝わるエピソードであるが、残念ながら画業については詳しく触れない。

私が本稿に月僊をとりあげた第一の理由は、彼が本居大平と並んで、経雅の懇意の人とされているからである。当然、記録中の登場回数も多い。まさに経雅の交友のありかたを探るキーパーソンなのである。それと、上記諸記録にはなかった、月僊の画業に関する記述の見られることが第二の理由となる。経雅の記録は、この画僧の画業の実態を探る上にも第一級の資料となりえよう。

以下に『経雅卿雑記』の月僊関連記事を読み進めていくことにする。(注9)

三

現在神宮文庫に所蔵されている自筆本『経雅卿雑記』の記事は寛政五年より始まる。巻一、寛政五年二月の記事に、はじめて月僊の名があらわれる。以下、順を追って月僊の記事を抄出し、その都度解説を加える。また記事の頭に便宜上整理番号を付することにする。

①寛政五年丑二月、早田但見定義頼ニ而寂照寺月仙へ並のきぬ地幅長サ廿三尺壱寸余、日ノ出ニ双鶴相頼候。為謝礼金百疋遣候。きぬ地別ニ遣候。同二月廿五日送り給候ニ付、即早田迄遣候。

文中の早田は中村に住した経雅懇意の医師である。経雅の著書『自裔真語』(大神宮叢書『大神宮儀式解・外宮儀式解』付録「中川経雅卿伝」に翻刻)によると天明三年経雅が病の床に臥した際、本居宣長らと共に往診している。

②寛政八丙辰三月廿六日鳥羽稲垣信濃守長続参宮。鳥羽稲垣信濃守家老稲垣弥惣右衛門へ送候。

本居染筆　ひき紙ニ

早春霞

君か世にあふうれしさは来る春も四方の霞の色に出けり

寂照寺月仙画扇　　宣長

蘭花已に散花画

賛ニ萬片飛花ト有し。

同時信濃守殿へ上候、如左。

月仙画　二枚

唐紙うす墨地(以下は同筆後補)

鶴亀ニよりし人物二枚也。

右上候。

稲垣長続は鳥羽藩主。清遠の俳号を持つ。弥惣右衛門房至は家老職。経雅から書物を貸りることがよくあった。記事中の宣長和歌は『鈴屋歌集』一之巻に見え、寛政四年に詠まれた。ひき紙は引染めにした紙をいうのであろう。

③寛政八辰七月廿四日、兼而寂照寺月仙江相頼候画きぬ地二帖認差越

益谷大学頼　礼金弐百疋

一ふく　臥龍孔明

一ふく　楠正成

益谷大学は菊谷末偶の息で末寿。別称を大学。内宮権禰宜、風日祈宮内人で宣長門。経雅とは懇意である。この記事の当時父・末偶も在世しており、七月八日には宣長書簡を経雅まで送っている。内容は宣長の桑名行を知らせるものであった。また経雅は九月に末寿書『みそぎの海』の序文を送った。鈴屋からの消息は末偶・末寿父子を経由することが多いようであるから、経雅サークルの重要人物といえる。なお月僊画の礼金は①を参照すると一枚百疋が基準であったようだ。

④寛政八丙辰十二月、孫福主税察経、旦家より懇望ニ而預御紹介、中之地蔵町寂照寺月仙之画申請度候、老子之画、商山四皓之画御頼被下候様申候。金百疋差越候。仍以手紙月仙へ申入候処、同月七日認来候間、孫福へ相渡。

きぬ地竪物　老子牛ニ乗画

巻紙よこ物　南山四皓

孫福察経は宇治下館町の物忌家で、孫福館大夫を名乗った。実は経雅の四男で、安永八年の生。天明六年に物忌家・孫福弘利の養子となった。商山四皓の画とは商山に隠れた四人の老人を画題にしたもの。

⑤寛政十年正月十一日、中之地蔵町寂照寺住持月仙和尚、為年

賀入来。予経雅不在不知。面拝。為年玉扇一本送候。給候件
画傀儡人冠獅子頭、従者袋持、互吹合烟草煙之図也。

⑥寛政十一年己未正月中之地蔵町寂照寺月仙和尚江寿老人鶴を
愛し候図画給候様申入。謝義金百疋。きぬ代八匁差遣候処、
同廿九日相認被越候
寿老人と鶴之図御急需、即認為持上候。御落掌可被下候。万々
其内懸御目可申上候。草々不具。
正月廿八日　寂照月仙
中川三神主様
右画則孫福館内石川布忠半右衛門へ相渡候。

⑥は⑤と異なり特別に注文の絵ゆえ礼金が生じた。石川布忠は「いしかわのぶただ」。孫福館大夫察経の家人とあるが、館大夫家の手代である。また月僊が度々経雅の館を訪問したことは⑤や以下の記事に照らしても明らかである。

⑦寛政十一年己未二月五日三予経雅寂照寺月仙方見訪申候。件
序孫福主税察経・同家人石川半右衛門布忠同道申。自今懇情
申返候様申入。三予年玉筆三対送候。察経・布忠各南鐐壱片
宛送候。月仙上人対面於画房別屋。酒羹已。任奢乞。小子江
掛軸一幅、与察経布忠へハ扇一握之白画恵候。此序別南鐐壱
片小子ゟ送候。横物二ふく望候処、早速相認呉申候。右小子
へ恵候掛軸之事、布忠懇望、仍送候。為右礼少子方へ酒弐升
差越候。

⑥で注文した絵を受けてより五日後、経雅は息子と、その手代を連れて寂照寺に赴く。⑥の礼を兼ねてのことであろう。布忠は絵画に関心の深い手代であったようで、狗図(月僊のではない)を経雅の館にもたらし、賛を乞うたことが同年春のこととして見える。また、何よりここでは非常にくつろいだ経雅と月僊の姿が垣間見られる。月僊は磊落不羈、かなり酒をたしなんだようで、江漢や白山が接待を受けた記録も思いあわせられよう。こういう人柄だから、経雅も無遠慮に一筆所望するわけであるが、画房で酔余即興の作を仕上げる様子に、『山中人饒舌』の以下の記述があながち間違っていないことに気付く。

人物簡にして疎朗。迫塞の処無し。多作に因りて漸く精熟を致すと雖も、又是れ天趣あり。

それにしても、いくら酔余とはいえ、月僊が与えた画と経雅の謝儀は釣り合わない感がある。百疋で一幅が常のところ、二朱銀一片で横物二幅まで与えているのである。ここに経雅と月僊との親昵の程が感得され、後者の大様な性質を読み取れはしても、礼金に拘泥する売僧然たる姿は認められない。

⑧(寛政十一年己未二月八日の記事、稲垣弥惣右衛門房至から書物貸借への礼状来る)

且又月仙画扇一本被下忝候。今一本倅へ遣し申度候。御手ニ入候ハ、御恵被下候様申来。(この記事前後略す)

⑨寛政拾壱年己未五月六日(稲垣房至に書簡を送る。その文言)

其節寂照寺月仙師画扇之事被仰下候間、申遣候得共事多趣ニ而埒やり不申。於承抛やりニハ不仕候得ともあまり延引故、此間小子罷越セめ付為画帰候間、此節遣上申候。(ここ鼇頭に「月仙画扇弐本差遣」とあり)

二月五日、月僊画房で絵を所望してより後、鳥羽藩家老より注文があり、それが滞っているので経雅は再び上人を訪うた。「セめ付」という言葉を使用する点に両者の親しい間柄が読み取れる。

⑩寛政十一未十月廿八日、栗谷寿老大夫家来細部喜代助、願月仙方画事類遣。即刻東方朔竪物一枚、墨画牡丹よこ物一枚、扇壱本画差越候。

栗谷寿老大夫(クリヤジュロウタイフと読ませている)は、宇治今在家町の御師。『大神宮儀式解』付録の「中川経雅卿伝」(「大神宮叢書」のうち『大神宮儀式解・外宮儀式解』の下巻。昭和十年)では経雅の館を「今在家町」と考証するから、それに従えば、栗谷大夫は近所にいたことになる。家来は手代のこと。

⑪寛政十一年未冬、宇治領中之地蔵町寂照寺住持月僊和尚画事高名ニ付、或人韓信か人の跨をくゝる状を頼けるに、即画て与へたり。この画を京都露庵へ見す。この賛の歌を頼けるに露庵即よみて書付たりける。

後つひに海となるへき山水も
しはし木の葉のしたくゝるなり

此歌を書付与へたりけり。

露庵は小沢蘆庵。経雅と直接交流はなかった。ただし蘆庵門人の橋本経亮と経雅とは交渉があった。同年十月九日、京より経亮が参宮し、経雅を訪問したが、あいにく末寿館に出かけて留守中と知ると、わざわざそこまで足を伸ばして経雅に面会しているのである。

実は、⑪の記事と一丁隔てて、円山応挙の絵に澄月が賛をした記事が見える。澄月は蘆庵と並ぶ京の有力歌人で、蘆庵と親交もあった。応挙は月僊の師といわれる。よって、この記事は、⑪と

あわせて京の人から得た情報を書きつけたものであろう。その京の人には十月に親交を暖めた経亮を想定するのが妥当ではないだろうか。記事にいう「或る人」は経亮であった可能性が高い。

また経亮は、宣長七十賀歌をはじめ、この度の旅行で詠んだ歌を冊子にまとめている。それが林若樹氏のもとに伝わり、三村竹清氏によって翻刻されている。(注10) 三村氏によれば、この冊子は経亮の自筆詠草に師・蘆庵が加朱したものらしい。歌集には月僊に会ったことを示す歌が見えず、経雅の記録にも経亮と月僊との邂逅については触れないけれど、経亮が旅で詠んだ歌に師の朱批を乞うた際、旅で得た月僊の絵をも見せたという想像は不可能であろうか。

なお経雅は、この記事より「月仙」「月僊」の表記を併用している。

⑫享和元酉八月二十一日、宇治二郷年寄、御奉行土佐守正貴招請。於中之切町年寄会合所ニ侍酒饗応ス。為地走中之地蔵町寂照寺住持月僊上人相招、令画申候。黄昏被帰去。月仙ハ小子経雅三十年来之懇意也。年々年始入来。自画之扇等被送候。小子も彼寺へ罷越恭々申返候。何そ有用事者可承候由。使者遣、忝候由申返候。帰寺候時不沙汰、仍送り人も不遣候。

記事の中で懇意とされる点で、月僊と本居大平とは双璧である。三十年来というのは二十年来の書き誤りか、やや大雑把な把握である。なぜなら月僊が寂照寺に入ってより二十六年目であったから。その月僊は年寄家御師たちの山田奉行接待に、相伴というよりも座興のために呼ばれて筆を揮った。そのついでに経雅に用―絵の注文―はないかたずねてきたのである。月僊に「送り人」を遣わさなかったとあるから、月僊は単身、文中の使者は経雅からのものと見、経雅は相伴にあずからなかったと推測する。

⑬享和二年戊正月のこと、孫福館大夫(察経の子・岩千代が継いでいた。)の手代・石川布忠が以下のことを伝えてくる。

朝明郡羽津村の孫福家旦家・森玄仙景福なる医師が、安濃津藤堂侯から鶴を一つがい拝領したので放し飼いにしている、そこで、これにちなんで鳥舎の斎号と、その額を経雅に依頼したいと。経雅は蘆上斎（のちの記事に「蘆上亭」）と命名…

且又中之地蔵町寂照寺へ罷越月仙上人ニ件の蘆上斎の図を為画、庭上鶴一双遊居候体、件額掛有候様為画、送遣候。

⑭享和二年壬戌十月五日朝明郡按蔵川村石川半右衛門布忠任頼、於月仙方ニ、事代主命於三穂の崎釣鯛画為認、右之上へ小子歌書付候様相願。仍詠之書記候。

母呂加美乃。御尾前止志天。大御門。
登波尓万毛良須。伊佐乎多布登吉。
（中略）
尚又森玄仙より当春認遣候蘆上亭之額、其外之事共忝奉存候由、為御礼一種差上候由也。

布忠は先にも月僊画を所望していたが、別に宣長の吉野山歌の軸も経雅に譲渡を乞うており、名家の作品を手元に集めようとしていたらしい。森は布忠の地元の医師で孫福旦家であったこと先の記事の通り。

⑮享和三癸亥秋宇治領中之地蔵町寂照寺月仙輪蔵造立。諸経調納。八月六日より右之供養執行有之。日夜貴賤参群集。

これが『雑記』に見える月僊の記事で最後のものである。ここで触れるのは現在も寺に残る総檜造りの回転式八角輪蔵で、設計は月僊の手になるもの。彼は寛政九年から伽藍整備事業にとりかかり、同十二年春に山門、大殿、庫裏、書院などを竣工。輪蔵の新築もこの年よりとりかかった。三年後に輪蔵が完成し、落慶供養が行われたのである。月僊はこれより六年後に遷化(注11)。経雅は落慶より三年後、先に逝ったのであった。『雑記』は没年まで営々と書き継がれるが、月僊の名は、この記事以降見られない。

四

以上を見てきて少々奇異に思われることは、三禰宜という高位の神官が緇衣と親交している事実である。

神宮が墨染めを忌避することは、芭蕉の『野ざらし紀行』をはじめ諸書に記されている。江戸時代、わざわざ僧尼用の拝所を設けて、それ以外での参拝を規制したことも周知の事実である(注12)。

神宮のかような姿勢の一方で、外宮方の三方年寄家には、それぞれ宗門があり、寺院の請書を徴せられ、課役すらあった。それでも内宮方では、年寄家で宗門を持つものはなく、唯一神道と称して通用せしめたらしい(注13)。このことからすれば、内宮禰宜の経雅と月僊との交友は、やはり異色のものであったと思われる。

ちなみに経雅は、寛政十一年四月五日、菩提山神宮寺の上にある称応院で、宣長・大平一行と出会い、歌を詠みかわして、その歌群を寺に遺していく。場所が神宮寺であるから、このエピソードを引き合いに、経雅が寺院に対して柔軟な姿勢をもっていたと判断することはできない。

とすれば、月僊との交友が、宗教的な意識とは別のところで成立する人間関係であったと見る方がよいのではないか。

⑮の記事は、輪蔵落慶供養の殷賑を簡潔に素っ気なく記録する。しかし「乞食月僊」と軽侮された彼の評価を一転させる伽藍再興

事業の達成点に位置するのが輪蔵落慶であり、墓碑銘は当然、これを賞賛してやまない(注6三村氏論文参)。ここでは代わりに、『古画備考』に谷文晁談として載せる記事を引こう。

寺産も豊に成りし時大破も修理を加へ追々再建し経文もさらになかりしを買集め自分の栄耀にハ少しも費やすことなくひたすら再興の志たゆむことなかりけるに…輪蔵を建候時に古市其外にても其徳義を感じ、勧めずして法財を寄附し、志願の如く山門迄も出来しと也。(注14)

経雅は月僊と交流する中で、伽藍再興事業を目の当たりにしていたはずだし、輪蔵のことも、友人が設計した段階から普請まで経過を知りえる立場にあった。一方で、その友人が画事に金をむさぼるとの悪評も耳にしていたと思われる。もちろん経雅は、伽藍再興という大義名分が友の画事に秘められていることについて、理解できていたはずである。では、友の事業の完成を、なぜかくも淡々と記録するにとどまったか。大義名分なるものが仏教の興隆に関わるものにすぎず、神ながらの道とは無縁だからであろう。だから輪蔵以外の竣工については記さない。それでも事業の到達点だけは、記録にだけとどめたい。⑮の素っ気ない記述は、経雅のそうした心を反映したかのようである。

また経雅は、寛政十一年に他家を継いだ四男を伴って寂照寺を訪うているが、男・察経は寛政八年の段階で旦家より月僊画を懇望されている。その三年後に察経を月僊に紹介し、「今より懇情申し返し候様申し入」れるのも、いまさらの感がないでもない。察経を出家と懇意にさせるのは、養家である孫福家に遠慮するところがあって、紹介が遅れたのであろうか。息の養父は天明六年、察経が縁組した年に亡くなっていたから(注15)、遠慮があったとすれば、孫福姓となった察経自身にであった。内宮方は年寄家でさえ宗門をもたぬところへ、孫福は物忌家という由緒をもつ。よって経雅は紹介を控えていたのだろう。とすると、旦家の絵の依頼や手代・布忠が月僊に強い関心をもったことに機を得て、察経自身が寂照寺同行を申し出たのであろうか。

月僊が僧侶であること、悪評があったことは、経雅サークルに関わる和学者たちにも微妙な陰影をおとしているかのようである。そのことは本居大平と経雅との交友を述べる別稿において論じたい。

経雅は月僊を「上人」とは呼んでいるけれども、彼が仏事や慈善事業に携わる姿を殆ど記さない。潤筆料で荒稼ぎする生臭坊主の悪評も、民衆を救恤する高僧への畏敬も『雑記』には無縁。画人としての姿があり、酒を汲んで衿契の交わりを結ぶ友の姿があるのみである。経雅が宗教的な意識とは別なところで、人間・月僊に親しんだと考えるのは、以上のような理由からである。

また『雑記』の記録により、月僊の画事の実態が確認できた。さらに彼の名声が京にまで届いていたこと、経亮かと思われる人物が絵を注文したことからもわかる。

そして、御師からの依頼を取次ぐケースが多いことに注意したい。これは、御師仲間の間で、経雅・月僊の交友が広く知られていたことをあらわす。さらに重要な問題は、御師を始めとする地元伊勢地方の人間がわざわざ経雅の仲介を依頼した理由である。注6三村氏論文に口碑として次のような話を紹介する。寺の普請中、月僊が、人夫の手間賃と自画・自画賛扇子をいくつも並べ、**銭か絵か好きな方を持っていけ**と言ったら、多くは銭を持っていった。しかし**好事家がこれを聞いてつめかけ**、扇面画を手間賃より高値で買っていき、しまいには書画屋までが来て扇面画をあさる。しまいに人夫も手間賃より扇をとるようになったと。月僊は「扇子か、扇子はもうかいた、皆の仕事をわしは半日ですましたじや」とうそぶいた。

これはあくまで口碑にすぎず、現実はこのようなものではなかった。ここまで軽忽に画事を試みる人なら、早田にせよ末寿にせよ経雅を通さずともよいわけである。それに口碑に言うほど仕上げが早ければ、⑨のように鳥羽藩家老からの注文を遅滞させるわけなどない。

また先に引いた谷文晁談では「其礼謝みな金子にて収納せられ絵よりも先に頼候時に差出し候例にて其多少によりてゑかかれり」とあるし、同じく三村氏論文が引く『鶴梁文鈔』にも同様のことが書かれている。これも『雑記』が記す範囲では信じるにたりない。さらに別の資料を補うなら、三村氏論文に紹介されている氏所蔵の書簡(宛て所までは紹介していない)には、龍の図に対し「御礼金百疋被下忝」とあり、もう一通には「八枚認差上候、蓋賛語認候…御謝義金弐百疋御恵賜忝」とある。百疋は経雅の記録にもある値で、基準額だったようである。それからすれば後者は随分割安だけれど、最初から注文主に額を聞いて描いている風に読めないし、前金制では決してない。『雑記』に見る月僊は、普請費用捻出のために、金額次第で、誰彼の区別なく、やたら筆をとる僧ではなかった。

武家も医師も御師も一様に、経雅を間に立てて月僊画を望んだのは、寛政八年ころから輪蔵落慶まで、住持の絵が望み通り、自由に入手できる状態ではなかったからである。経雅が仲介をとった諸人は、画題を指定している場合が多い。恐らく望みの題の絵を、早く確実に入手するには、経雅のくちききが効果覿面と思われたのであろう。ただこのように考えるのは、二人の普段の交友を知る経雅サークル圏内の者である。経雅への注文が殆ど地元の人物からなされているのは、そういうわけでであろう。

『雑記』は日次記ではない。ここに記されていない取次ぎのケースもあるはずである。⑫に見える「何そ有用事者可承候」という月僊の気遣いは、経雅からの注文が多かったことを想像させる。

絵は経雅の仲介を経て御師の旦家や御師自身の手元に届けられた。月僊画の普及には、経雅のサークルと御師のネットワークが果たした役割も指摘できるのである。

注1　平成十五年度日本近世文学会春季大会における加藤弓枝氏の発表「伊勢御師の学芸」が注目される。

注2　「近世文学研究と評論」平成7年第四九号にある拙稿「清渚集における綾足・秋成・麗女」を参照されたい。経雅が麗女筆の扇面を所持していた事実を指摘したが、雑記に麗女の名が見られるのはこれと、幾つかの麗女著作を貸与した記事くらいである。

注3　月僊は『経雅卿雑記』を始め諸資料に「月仙」と表記されている。彼の号の表記は四種類にわたることが、以下の本文で紹介する浜口良光氏の著書において指摘されており、「月仙」は生涯随時に使用されたものらしい。本稿の本文中では、伊勢市立郷土資料館における特別展において「月僊」の表記が採用されているのに従うことにした。

注4　岡崎市教育委員会編『岡崎市史　絵画』がまとまっているほか『宇治山田市史』でも月僊に触れる。伊勢市立郷土資料館で平成五年二月二十七日より開催された第六回特別展の図録『画僧　月僊』も簡便ながら要を得た月僊伝を掲載する。

注5　参「大日本文庫　芸道篇『画道集』」（滝精一校訂　春陽堂昭和十三年）。ただし書き下しは筆者による。

注6　中林竹洞『竹洞画論』は「亦悪俗の甚だしきは月仙が流れなり」などと手厳しい。山口論文参。日本書誌学大成『三村竹清集』第七巻（青裳堂書店刊）所収「画僧月僊」にも近世期における月僊評伝が集められているので参照のこと。

注7　日本古典全集第二期『西遊日記』（昭和二年　正宗敦夫ほか編　日本古典全集刊行会）

注8　森銑三「完本蕉斎筆記を読む」『森銑三著作集』第十一巻（中央公論社　昭和六十四年）

注9　『経雅卿雑記』は神宮文庫蔵自筆本をもとに翻刻した。表記は現行の字体にあらため、読みやすさの便をはかって句読点を付した。

注10　日本書誌学大成『三村竹清集』第七巻所収「橋本経亮伊勢に遊びし折の和歌」

注11　伊勢市立郷土資料館第六回特別展図録『画僧月僊』掲載の年譜による。

注12　『宇治山田市史』382頁による。

注13　旅の民俗と歴史5『伊勢参宮』（宮本常一編著　八坂書房　昭和六二年）160頁。

注14　注10三村論文による。

注15　『自裔真語』による。『大神宮儀式解』付録「中川経雅卿伝」の翻刻を使用。

貴重な資料閲覧の便宜をはかって下さった神宮文庫に深く感謝の意を表したい。